

2011年中(暦年)のご寄付者の皆さまへ

あしなが育英会

会長 玉井義臣

**重ねて「あしながさんこそ遺児たちの師」。  
”短足おばさん”でも結構です、「あしながさん」になってください。**

拝啓 皆さまにおかれましては時下ますますご清栄のことと存じます。日頃より遺児たちへのご支援ありがとうございます。私ごとですが、私玉井義臣は本日をもちまして77歳になりました。過日、あしなが育英会奨学生、学生募金事務局、(社)日本ブラジル交流協会の卒業生ら約400人が参集し、私の“喜寿”を祝ってくれました。多くの懐かしい顔に会い様々なことを思い出した次第です。

#### **あしなが運動の同志たちと熱く語り合った日々が走馬灯のように**

藤村修・現内閣官房長官も駆けつけてくれました。藤村修君は広島大学工学部1年生の終わり頃、私にオルグされ、以来40余年間遺児と共に歩む、私の最古参の同志です。彼は遺児ではなかったが自動車部に入り、「全国学生募金」(略称)に参加し、活動中、交通遺児作文集『天国にいるおとうさま』に掲載の中島穰君(当時10歳)の詩を読み、悲しい感動をおぼえると同時に、クルマ好きの若者故に「この遺児らを、高校大学に行けないことで社会から落伍させてはならない」という高い共通認識をもち、遺児救済運動にのめり込みました。藤村君はバスの運転免許を持ち、遺児たちを乗せて遠足に行き、ゲームをしたり歌をうたったりして励まし続け、「広島遺児を励ます会」を創り、私が主催した全国の励ます会の仲間と合宿し、朝から晩まで議論し、夜は日本酒や焼酎を徹底的に飲み合い、ここでも激論を重ねていました。専攻学部如何を問わず、彼らの議論のテーマは交通問題、そして、私が提案した「ユックリズム」についてでした。私は当時、現代物質文明が世界を崩壊する危惧を問題提起しました。文明がまさに「死の行進」を始めてしまったということを感じたからです。

(ユックリズム：玉井が1962年に提唱したもので、人間の欲望を刺激する商品、例えば自動車は人と貨物を積んで走り快適で部品が1万数千点からなるため、部品工業をたくさん裾野にもつ戦略産業なるがゆえに、自動車を売れば売るほど経済は成長する。しかし、その影の部分といえる交通事故死者はうなぎ登り、警察統計を見ると、マイカー元年といわれた1959年頃より1968年頃までに死者約12万人を記録した。自動車は人の命を殺傷するほか、多くの部品が多くの資源を食いつぶし、貴重な石油をガブ呑みする厄介な悪魔の下僕。石油汚染をもたらし、地球温暖化や異常気象の元凶ともいえる。何より自動車1台に使う資源は極端に多い。玉井は「クルマが地球を破壊する」と断じた。そして、欲望を捨てて速くなくていい「ゆっくり」した生活を守ろうという「ユックリズム」を提唱した。玉井義臣著『ゆっくり歩こう日本』1972年サイマル出版会刊参照。アマゾンドットコムで探すとあるかもしれま

せん。)

話は難しくなりましたが、世界の環境破壊だけをとっても納得していただけることでしょう。しかし、発展途上国の人々は、先進国の人々が自動車・家・家電で便利さを享受した分、地球にどんな不都合が起ころうが、自分たちも同じ便益を受けたいと思うことから、地球資源はどんどん蚕食され、地球はいずれ崩壊するとしか考えられません。これが私の「ユックリズム」の提言です。

参議院の本会議で自らがガン患者であることを告知し、議員立法「がん対策基本法」を通過させて早世した山本孝史君も「励ます会」の全国研修ではよくディスカッションをした運動の同志です。ものすごい勉強家でした。私自身が細川護熙氏に国政出馬を薦められましたが、私が出ると遺児救済運動は潰れること必至でしたので、私は固辞して、1992年の総選挙に藤村君と山本君を推薦しました。この二人は有名ですから引き合いに出しましたが、皆、学生の正義感で、実に一生懸命やっていました。これが“あしなが”の基盤をつくっているわけです。

### 運動を爆発的に発展させた作文「天国にいるおとうさま」と「あしながさん」キャンペーン

自動車部員を感動させ救済運動に走らせた「天国にいるおとうさま」を1968年、「桂小金治アフタヌーンショー」で中島穰少年君が読み始めると、小金治さん涙滂沱（ぼうだ）。技術さんも泣いた。スタッフも泣いた。レギュラーで冷静を装っている司会者の私だけが泣かずにじっとスタジオを凝視していました。この番組はテレビ2台に1台の割合で見られているという超お化け番組で、茶の間に全国無数のファンが見ています。私は、そのお茶の間の涙が突然スタジオに逆流してくるのを感じました。私はすかさず、政府の交通担当の田中龍夫総理府総務長官に、「実態調査を全国でやってほしい」と質問、長官は「すぐにやりましょう」と答えました。「天国にいるおとうさま」は国会予算委員会でも質問され、時の佐藤栄作首相は「反対できるテーマだとは言えない」と答えました。

国会で「超党派で交通遺児の育英財団をつくれ」と決まり、69年5月2日、(財)交通遺児育英会（永野重雄会長、玉井専務理事）で、お金もないのに世論の支援という風でスタートしました（私のこの運動の動機となった母の交通事故死から4年半が経っていた）。

78年、石油ショックのため、街頭募金で集めたお金だけでは奨学金は風前の灯火でした。画期的な募金方法でないと、この資金難はとてども乗り切れないと思いました。私は、月額を決めて継続的に募金してくださる人を探してはどうかと思い、ある大新聞に「教育里親募集」と出してもらいましたが、まったく何の反応もなく半年ほど考え続けました。そして、「あしながおじさん」ではどうかとふと浮かんだ姉の記憶がヒントになりました。私が小学校に上がる前に姉はカリエスで自宅療養していました。高等小学校を出てから看護婦になったのですが、激務で結核になってしまったのです。

姉は文学少女で本をよく読んでおり、私にたびたび読み聞かせしてくれました。本の筋より本に描かれている奇妙なイラストを、私は忘れることができなかつたのです。“教育里親”が失敗したあと、この「あしながおじさん」はどうか。案外いけるのではないか。それに教育里親はイメージが暗いが、「あしながおじさん」は小説でも愛読者が多いし、みんな自分自身が「アボットなら」という空想もふくらませられるに違いないと思ったのです。

1979年、今度は読者にインテリの多い大新聞での「あしながおじさん」募集にかけました。高校生奨学金月2万5千円を毎月送金するのが基本で、大学生なら月4万円もあるが、だいたいは高校生への支援でした。電話は鳴りっぱなし、私がついた1本は女優の森光子さんでした。「私でもやれるでしょ

うか」「売名行為と思われるといやですから」。でも、この森さんが学生たちの街頭募金の先頭に立っていただくようになるといよいよ「あしながおじさん」の広がりが見えていきます。

そのうち、新聞の投書に「“短足おばさん”でもいいですか。1か月に2万5千円出すのは苦しいが分割でもいいならぜひ応募したい」。これが人気をさらにあおり続々“短足おばさん”が増え出し、女性はおじさんはイヤネ」の声が増えましたので、すべて「あしながさん」と呼ぶことにしました。アイディア一つで募金の成果は様変わり、「あしながさん」は日本人のやさしさをわしづかみにしたのです。

夏、高校奨学生は「つどい」で「あしながさん」からの手紙を初めて読みました。それまで、高校生のはほとんどは「奨学金は政府が税金で出してくれている」か、「お金持ちが同情して出してくれてる」などとひがんだ受け取り方をしていました。これではせっかくのご寄付は死んでしまうと、私たちは慌てました。そこで、あしながさん申込動機を小冊子にして遺児たちに輪読させたのです。「7歳で亡くなった娘が生きていれば19歳。娘の代わりに生きてほしい」「10歳の時に父親と死別。18歳のとき母親と離別。高校だけとは思ったが、昼間から夜間に変えねばならなかった。教育には経済力が必要だが、高校の恩師や上司が応援してくれた。今度は私が応援したい」「大学へ行きたかった。とうさんとかあさんが早く死に定時制高校へ行った。大学には行けなかった。全日制の高校そして大学へ行きたかった。わずかだけ送ります。がんばれよ」——などなど。

遺児たちは「あしながさんはお金持ちどころか、ぎりぎりの生活から送金してくださっているのだ」とわり頭を下げて、涙を浮かべて感謝します。ひねくれた子も愛を注がれると素直になります。これは大変なあしなが効果です。そのうちに夏のつどいで、皆で何かその無償の愛に恩返しをしたいと話合うようになりました。そして、神戸の大地震のあとは日本と海外の遺児とのつどいコラボレーションが実現し、アフリカ・ウガンダのエイズ遺児が日本の大学に留学するというような大きな成果をあげることに発展していきます。

「奨学生のつどい」のいいところは、話し合いが多く友だちがたくさんできるので“心の友”といって、学校での友だちよりつき合いの時間は短いのに、濃い心で結ばれた友を得られることです。彼らが心友と呼ぶのもわかります。そうこうして2～3年もすると、あしながさんへの感謝や恩返しの気持ちが定着していきます。これがすばらしい。あしながさんのお金が確かに“生きている”と実感いたします。

### **経済不況で奨学資金の先行きが心配、新「あしながさん」になってください**

しかし、従来からの奨学金に津波遺児の奨学金が加わり資金需要は高まるのは必然です。これからは、東北の復興とレインボーハウスの早期建設が急務となりますが、世界的に大きなマイナス材料が次々と出てきそうなので、あしなが本体も影響を受けざるをえず、あしながさんにおかれましても考えていただければ誠に幸いです。

1) ヨーロッパの財政危機。欧州諸国では経済の「格付け」で優劣がつくが、ギリシャの国債の下落が始まり、スペインがもっとも悪く、ポルトガルからイタリアまで格下げされ、フランスも危ういと言われ、それらの国債を持つユーロ諸国やアメリカまで大きな影響を受けた。金利危険ラインの年利7%を突破し、世界に影響をもたらした。今後とも危険信号でもしデフォルト(債務不履行)を出せば、その影響はEUのみならず世界にも及び日本も例外ではない。



2) アメリカも不動産ローンの問題は解決していないし、戦費の使いすぎ、科研費の激減で、超低金利の延長などを考えると本格的な景気回復はあまり望めない。

3) 中国もGDPが7%台から新指標の予測では4%台に落ちる。日本も製品が世界一のものがなくせいぜい部品が世界一ぐらいで、展望は暗い。大変なスピードで超高齢社会になるのは必至である。

4) 日本も衰退一途であり、50年先に人口は3分の2になると発表された。人口が多くなると消費は徐々に減っていくのが、大問題である。先日、日本の国際収支は31年ぶりに赤字になりました。TVの中継で、経団連会長が「日本売りが始まるよ！」と叫んでいました。転落へのシグナルです。

このように日本および日本人の前途は暗いと言わざるを得ません。また、日本人の質の劣化も意外に早いようです。ゆっくりと坂道を下るさまは若者にとっては、世界的傾向とはいえ、前途を非常に不安に感じるのも仕方ないことと思います。そうした日本をとりまく環境の中で、日本人全体の基礎学力の低下(質の劣化)がどんどん進む傾向のもと、遺児たちの学力低下はもっと速く進みます。

今の日本の教育と職場の状況を見ると、例えば遺児にも全国の学習塾とタイアップして学ばせ、ワークハード(WORK HARD)の上で学力回復させるシステムを開発して、それが実現すれば、あしなが育英会が給付奨学金制度で学習塾に直接支払うというネットワークを組むなど考えられないだろうか。これはまだ頭で考えている段階ですが、いずれにしても小中学生の時に親を失った子の成績が急降下する現状を真正面から見据え、高校入試時までには追いつける体制を真剣に考えなければ、遺児たちは最下層の最下層に落ち込み、社会の余計者になって身を滅ぼしてしまわないかと憂慮します。本来これは文部行政の領域ですが、そう言っている間にも脱落者が増えるとすれば、あしなが育英会が民間の教育機関、例えば学習塾などと手を組むなりして学力低下を阻止し上昇戦線に乗せねばならなりません。

何にしても、小中学生への新しい奨学金を創設することが急務です。高校、大学等の奨学金はあしなが育英会発足の1993年以来、据え置きとなっています。高校授業料無償化といっても生活費を考えると楽になっているわけではありません。貧困階層から教育の機会均等はますます遠のいているのが現実です。

あしながさんが増えて本会の資金に余裕ができないと、貧困者でも高等教育の場で負けない体勢とする変革はできません。今一度あしながさんのご助力を得て、①最下層の澱(おり)のような所まで落ち込まない、②勉強できる環境を系統的に再構築して高校入試前には足並みを揃えることができる体勢をつくるなど、教育の技術革新を含め有識者の智慧を集めて、ぜひ取り組みたいと考えています。

同封資料の中に「あしながさんになってください」(あしながさん資料請求書類)が入っています。私たちの上述の提言も含めて新年度には真剣に取り組みたいと考えています。手探りですが、1年2年かけてでも新制度をつくりたいと存じます。ご賛同いただける方ぜひ「あしながさんになってください」。

寒さ厳しき折、なにとぞお風邪など召されぬようくれぐれもご自愛くださいませ。

敬具